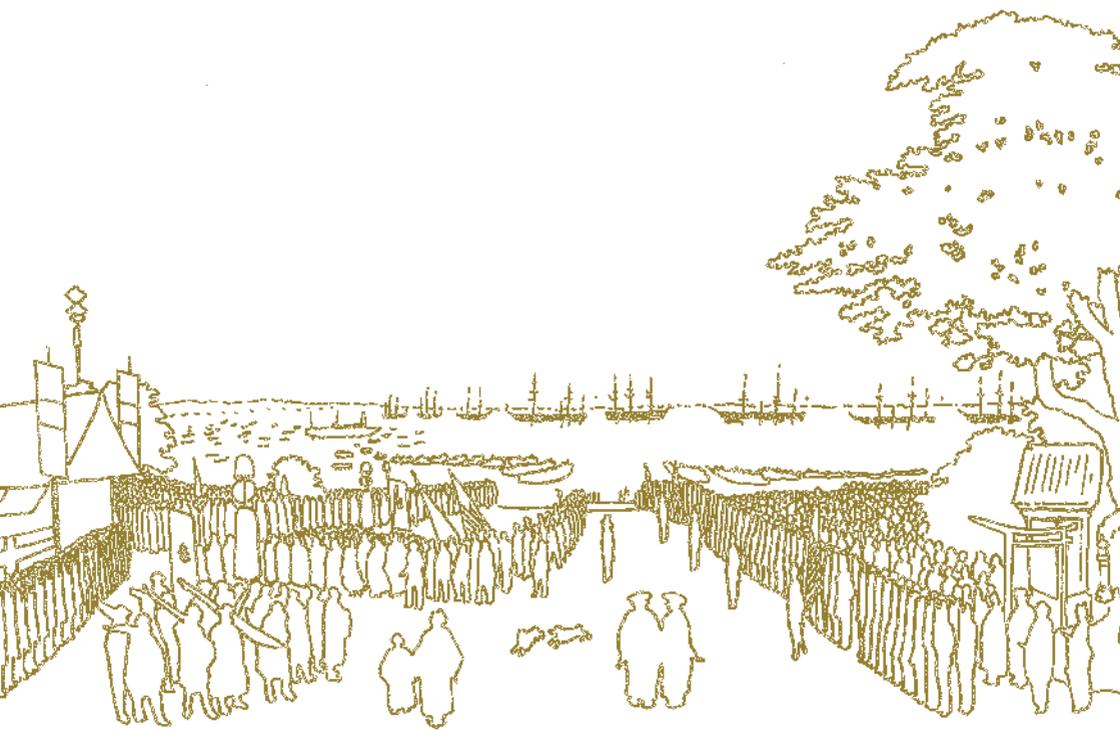


# 絵でたどる ペリー来航展

—6つの場面についての記述

Following the Path of  
Comodore Perry's Arrival through Images  
The Stories behind the Six Scenes



## ごあいさつ

小さな横浜村にペリー艦隊の一行が上陸した場面《ペルリ提督横浜上陸の図》は、横浜開港につながる歴史的瞬間を描いた作品として、横浜美術館のコレクション展においてもしばしば展示されてきました。学校教育においても中学校の社会科などで扱われるので、その内容はよく知られています。

1854年3月8日のできごとが、まるで演劇の場面のように描かれた本作は、ヴィルヘルム・ハイネによるものとされています。ハイネはペリーが率いるアメリカの東インド艦隊の随行画家でした。遠征の公式記録が『ペリー艦隊日本遠征記』(以下『日本遠征記』)として編纂された折に、ハイネの描いた図像は石版画や木版画による豊富な挿絵として用いられました。エリファレット・ブラウン・ジュニアも写真家・画家として随行し、数多くの銀板写真(ダゲレオタイプ)やスケッチが同様に挿絵となっています。

ペリーが来航した当時、絵画は記録やイメージを伝える技術の中心にあり、いっぽう石版画や写真は、印刷や出版文化と結びついて展開していた新しい技術でした。『日本遠征記』には、異国の風景や人々の様子を生き生きと伝えるためのビジュアルイメージが豊富に用いられています。

本展では、初めに日本人が描いた横浜におけるペリー艦隊の様子をご覧いただきます。次にハイネの水彩画をもとにした『日本遠征画集』の6つの場面を技法の違いで比較し、また『日本遠征記』やハイネの著書の記述などをその場面と重ねてみていきます。

さまざまに描かれたペリーの日本来航の場面をとおして、高層建築が立ち並ぶここ「みなとみらい」から、時をさかのぼり、皆様の想像力を165年前の横浜に誘います。

横浜美術館

## はじめに

この冊子は、描かれた6つの場面を、同じ場面に関する記述と合わせてみていくためのものです。記述は、ペリー自身の記録が元となる『日本遠征記』、画家のヴィルヘルム・ハイネが著した『ハイネ世界周航日本への旅』、通訳のサミュエル・ウェルズ・ウィリアムズの『ペリー日本遠征随行記』の3冊から抜粋しています。各々の文章を読みながら作品をご覧いただくと、当時の天気、季節、人々、風景などについて、肌で感じられるのではないかと思います。

本展「絵でたどるペリー来航」の核となる6つの場面は、『日本遠征画集』の石版画(6点)のほか、原画と思われる水彩画(5点)、さらに油彩画(5点)でも描かれており、これらを併せて展示しています。『日本遠征画集』の出版について、画家・銀板写真家のブラウンがペリーに宛てた手紙には、ブラウンが、費用を負担し出版したい、完成したらペリーに100部差し上げたいと記されています。ブラウンからペリーへ、ペリーから当時の海軍長官へ許可を得て発行された石版画集です。それは『日本遠征記』出版の1年前、1855年のことでした。

以下の表のとおり6つの場面それぞれに水彩画、石版画、油彩画があり、数点みつかっていないものもありますが、琉球の場面の油彩画のみ2点ありました。それぞれの作品の細部を比較してみると、わずかながら違いもみられます。

本展をごらん頂くみなさまには、水彩画、石版画、油彩画の比較とともに、この冊子

場所		水彩画	石版画	油彩画
琉球	1853.6.6	○	○	○○
旗山崎	1853.7.11	○	○	—
久里浜	1853.7.14	○	○	—
横浜	1854.3.8	○	○	○
下田(上陸)	1854.6.8	○	○	○
下田(軍事演習)	1854.6.8	—	○	○

を通して、その日、その時の臨場感を伝える3冊の本の記述から、描かれた細部にも目を向けていただけるような鑑賞となれば幸いです。

端山聡子(横浜美術館 主任エディケーター/主任学芸員)

## ペリー提督と遠征隊士官、兵士の上陸 横浜にて日本側の委員と会見

Landing of Commodore Perry, Officers & Men of the Squadron, to Meet the Imperial Commissioners at Yoku-hama, Japan, March 8th 1854.



油彩画 出品リスト8

### 🖼️ 場面説明

この日の正午頃、初めての日米会談のため、ペリー一行が横浜の海辺から、近くの応接所(条約館)に入る場面です。横浜沖に並んだ艦隊から、短艇(カッター)に乗り換えて上陸しました。アメリカの楽隊が当時の国歌にあたる「ヘイル・コロンビア」を演奏したそうです。画面右手前には水神社と玉楠の木、出迎える日本の役人たち、整列する隊列の背後に日本人の群衆が描かれています。

### Q 絵の細部について

石版画、油彩画は神社の鳥居の笠木(上部の横木)の左右の長さがいびつである。



石版画 出品リスト10



水彩画 出品リスト9

まもなく、一艘の大型の御座船「天神丸」が近くの神奈川の町から湾を下航してきた。この華やかに塗装した船には甲板があり、船体の上には広い天幕が高く張り渡されていて、わが国の西部の河川用蒸気船に実によく似ていた。三本のマストには吹き流しがひるがえり、色鮮やかな旗と多彩な帳が上甲板を飾っていた。この御座船は日本委員を運んできたもので、海岸の近くに達すると、彼ら高官たちと部下は数艘の小舟に乗り移り、陸へ急いだ。(中略)この日はさわやかに晴れ上がり、景色はまだ去りやらぬ冬の跡を残していたが、なにもかも心地良く目に映えた。P

引用文献凡例 出典を以下の記号に略しています。文章は下記の文献の表記のままです。

P = 『ペリー艦隊日本遠征記』 H = 『ハイネ世界周航日本への旅』 W = 『ペリー日本遠征随行記』

この日はさわやかに晴れ上がり、景色はまだ去りやらぬ冬の跡を残していたが、なにもかも心地良く目に映えた。

——『ペリー艦隊日本遠征記』

私が緑の麦畑の中を歩いていると、突然私の足もとから雲雀が飛び立ち、旋回しながら空高く舞い上がった。私は思わず立ちどまり、この翼のついた小さな歌手の楽しい歌に耳を傾けた。私は思わず立ちどまり、

「ハイネ世界周航日本への旅」

天気は穏やかで暖かだった。こちらへ走り寄ってきた群衆も邪魔にはならなかった。黒と白の筋のある長い亜麻布の幔幕は、提督の強い要求によって、今回は取り払われていた。だから、野原の上に少しばかり逍遙するの妨げるものは何一つなかった。冬の名残りは連山の頂きにもほとんど見えなかった。火山の富士山さえも、白い帽子に黒い斑点をいくつか見せはじめていた。H

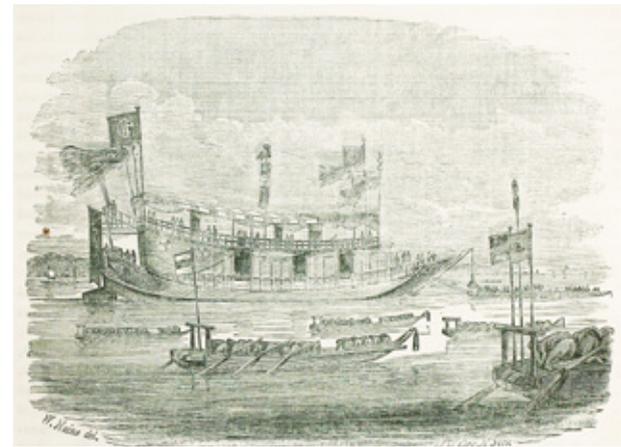
私が緑の麦畑の中を歩いていると、突然私の足もとから雲雀が飛び立ち、旋回しながら空高く舞い上がった。私は思わず立ちどまり、この翼のついた小さな歌手の楽しい歌に耳を傾けた。それはしばらく見なかった故郷の友が私の心に語りかけたようだったのである。故郷を離れた放浪者の私が、祖国の畑を最後に歩いたとき、雲雀が歌っていた。そしてその時以来この鳥の声を思い出すことはなかったのである。H

上陸すると、提督は士官団に迎えられ、士官たちは一列になって提督のあとに続いた。軍楽隊が軽快な曲を奏で、横列に並んだ完全軍装の海兵隊が、青と白の制服に身をかため、威風堂々と隊伍を組み、銃剣をきらめかせて捧げ銃をする中を、提督は直属の幕僚と、容姿端麗な水兵の護衛隊と多数の属官を従えて、海岸を行進していった。P

提督が日本の土を踏み、われわれの間を進むと、すぐわれわれもそれに従って接見の大広間に入った。隊員は捧げ銃をし、軍旗は下げられ、軍楽隊は「ヘイル・コロンビア」の国歌を奏した。これと同時に、パウアタン号は日本の幕府の旗を掲げ、ボートにあった銃砲は二十一発の礼砲を発し、さらにそれに次いで幕府委員(全権の大臣)のためにも十七発の礼砲が発せられた。H

条約館は急ごしらえで、白木のままの松の木で建てられ、屋根が尖っていて、広大な地所を占めており、間口、奥行き四〇フィート[約一二メートル]と六〇フィートの応接用の広間があり、いくつかの部屋と事務室がそれに接続していた。P

入り口の両側に一本ずつ二本の竿が立てられ、その竿には中央に真赤な横縞を一本引いた白木綿の長方形の長い旗が下げられた。この建物の尖った屋根の上には高い棒が立てられ、その頂点にはシャンデリアの頭部に似た形をした丸い飾りがついていて、そこから重い絹の房が吊されていた。P



『日本遠征記』より「幕府の船、横浜」



『日本遠征記』より「横浜の道沿いの神社」

## ペリー提督と遠征隊士官、兵士の帰還 琉球の首里城に摂政を公式訪問後

Return of Commodore Perry, Officers & Men of the Squadron from an Official Visit to the Prince Regent at Shui, Capitol of Lew Chew, June 6th 1853.



石版画 出品リスト13

### 🖼️ 場面説明

画面遠景の丘の上の首里城<sup>しゅりじょう</sup>を訪問した帰り道の場面が描かれています。隊列の中で籠に乗っているのがペリーです。大きな木の下には出迎える隊員たちの姿。画面右下には東屋<sup>あずまや</sup>でくつろいだり、傘を持つ琉球の人物たちが描かれています。

### Q 絵の細部について

水彩画のみ、出迎えるペリー艦隊の隊員たちが、帽子を振っている。石版画と油彩画に、大きな木の下で一行をスケッチするハイネと思われる人物が描かれている。手前の老人が手に持つ傘の上下が、石版画だけ異なる。

丘を下ったのは正午近くだったので、太陽が行列の正面からもろに照りつけて、ひどい暑さだった。しかし、樹木の茂った斜面に着くと、快い海風が吹き、湾の上にボートが静かに浮かんでいるのが見えた。ボートの乗組員は木陰で数組のグループに分かれ、行列の来るのを見守り、合衆国を代表する「老提督」にふさわしい尊敬が払われたかどうかを確かめようと待ち構えていた。(中略)二時半までに、行列のすべてが艦に乗り込んだ。P

美しい松の影を落とす道や、丘陵<sup>きゅうりょう</sup>、緑豊かな野原の続く道を、われわれは旗をなびかせながら、愉快的音楽を奏しつつ進んだ。艦上に残った他の多くの将校、水兵、海員たちは、道の途中まで出迎えにきていた。そして丘の上、木の下、道の左右に並んで、帽子を振りながら嬉しげに挨拶したのである。H

私は、島内への遠征中も、またこの公式訪問の間でも、多くの興味深い情景をスケッチした。嬉しいことに、私のカバンはそれだけでいっぱいになり始めている。首里への道中も、花が咲いた生き生きとした風景であり、私にとっては素晴らしいモチーフであった。H



水彩画 高倉幸一氏蔵(画像提供)



油彩画 出品リスト12



油彩画 出品リスト11

丘を下ったのは正午近くだったので、太陽が行列の正面からもろに照りつけて、ひどい暑さだった。——「ペリー艦隊日本遠征記」

## ルビコン河を渡る「ミシシッピ号」の S.ベント大尉が江戸湾調査時に 初めて日本船の間を分け入って進入

Passing the Rubicon. Lieut. S. Bent in the “Mississippi’s” First Cutter Forcing His Way through a Fleet of Japanese Boats while Surveying the Bay of Yedo, Japan, July 11th 1853.



石版画 出品リスト15

### 🖼️ 場面説明

測量のため、ペリー艦隊のベント大尉が指揮する短艇が現在の横須賀・観音崎の北側、旗山崎<sup>はたやまざき</sup>を越えました。江戸湾に外国船の進入は認められないため、海防の船が阻止しようとしています。左の帆船は千石船<sup>せんごくぶね</sup>。遠景には艦隊の蒸気船が描かれています。題名の「ルビコン河」は、古代ローマ時代、ユリウス・カエサルの軍が禁をおかしてその河を越えた故事から付けられました。

### ❓ 絵の細部について

水彩画には画面左の海面の板の上に「1853年7月12日」と記されている。

測量艇は艦隊の停泊地から江戸に向かって一〇海里<sup>\*</sup>から一二海里ほど進んだ。湾を遡航<sup>そこう</sup>しているとき、たくさんの政府の船が現れ、侵入者に立ち去るよう手ぶりで合図し、また三五艘ほどの小舟が測量隊の進路の前方から、行く手をさえぎろうとするかのようにまっすぐ漕ぎ寄せてきた。P ※およそ1.8km

いつものように一日中、湾では日本の帆船<sup>ひんぼん</sup>が頻繁に往来し、見たところさかんに商売をしているらしく、艦隊の存在はなんの妨げにもなっていなかった。それどころか、漁船やそのほかの舟が艦隊のすぐそばまで近づくことさえあったが、これはたんに好奇心を満足させるためであることは明らかで、これらの船の乗組員たちは立ち上がって熱心に眺めるだけで、警戒の色も敵意の色も見せなかった。P

日本側は多数の小船を結集していた。船には、それぞれ装具を付け、槍と刀を持った兵士八人ないし十人が乗り込んで旗をはためかせ、武士は測量隊を阻止するために部署<sup>おうどう</sup>についていた。(中略) 武士の中には、黄銅<sup>かぶと</sup>の兜を被って、銅鎧の一種を着けたのがあり、また、ある者は赤ジャケット[赤ラシャの陣羽織]を着込んでいた。W



水彩画 出品リスト14

久里浜 Kurihama | 1853年7月14日

## アメリカ人の日本初上陸

### M. C. ペリー提督の下で久里浜へ

First Landing of Americans in Japan, under Commodore M. C. Perry at Gore-Hama July 14th 1853.



石版画 出品リスト17

#### 🖼️ 場面説明

ペリー一行は米国大統領の親書を海岸近くに設けられた応接所で渡すため、現在の横須賀・久里浜に上陸しました。アメリカ国旗、海軍旗とともに歩みを進めるペリーが、日本の応接掛に出迎えを受ける場面です。先んじてペリーを待つ海兵隊や水兵たちが整列しています。画面右に騎馬隊の馬や日本の警固けいごの人々、画面左奥には艦隊の蒸気船がみえます。

#### 🔍 絵の細部について

石版画の画面右奥に富士山が明確に描かれている。

同湾を眺望すれば、久里浜村の左手に屋根の尖った家屋が立ち並んでいた。この家並みは海岸と高地の麓ふもとの間に建てられ、高地は背後の緑におおわれた坂に連なり、しだいに高くなって彼方の山々に続いていた。📍

この日は快晴で明るい太陽の光は、青々とした丘の中腹、華やかな旗、きらびやかな兵士たちに、ひとしく新たな生命力を吹き込んでいるようだった。海岸の後方、湾曲した湾岸中央の向かいに、応接所として建設されたばかりの建物が、三つのピラミッド形の屋根を、まわりの家々の屋根から高く突き出していた。建物の前面は縞の幕しまでおおわれ、幕は両側に張りわたされていた。建てたばかりの屋根はみずみずしく、尖った頂点は遠くから見ると穀物を堆積した巨大な山のように見えた。📍



水彩画 出品リスト16

この日は快晴で明るい太陽の光は、青々とした丘の中腹、華やかな旗、きらびやかな兵士たちに、ひとしく新たな生命力を吹き込んでいるようだった。——『ペリー艦隊日本遠征記』

下田 Simoda | 1854年6月8日

## ペリー提督と遠征隊士官、兵士の上陸 下田にて日本側の委員と会見

Landing of Commodore Perry, Officers & Men of the Squadron, to Meet the Imperial Commissioners at Simoda, Japan, June 8, 1854.



石版画 出品リスト20

### 🖼️ 場面説明

大きな木の下でペリーが日本の応接掛の挨拶を受けている場面です。了仙寺<sup>りょうせんじ</sup>まで歩く隊列には大砲が4門あります。画面手前には地元の日本人たちの姿と、セーラー服を着て帽子をかぶり、スケッチをするハイネと思われる人物がいます。ペリー艦隊は了仙寺で日米和親条約付録（下田条約）に調印しました。

### Q 絵の細部について

水彩画のみ画面右手前には子どもと犬、スケッチするハイネと思われる人物の左側に2人子どもが描かれる。石版画、油彩画には、画面左奥の湾内でエリファレット・ブラウン・ジュニアが銀板写真を撮影する姿がごく小さく描かれる。

翌日<sup>\*</sup>、提督はしかるべき護衛兵を従えて上陸し、寺院[了仙寺]において委員たちに迎えられ、例によってかしくまった挨拶を受けた。P

<sup>\*</sup>6月8日

日本人はとくに音楽が好きらしい。下田で提督が軍楽隊とともに上陸すると、町中の半数の人々が、それを聞くために集まって来た。H

正午、提督は十七発の礼砲がとどろく中を陸へ向い、各艦から総出動した野砲<sup>やほう</sup>四門を装備する海兵、水兵の大護衛部隊が従った。これに士官の一隊や軍楽隊を加えると、総勢三百名を上回った。天候は申し分なく、上陸地点から寺[了仙寺]までの沿道は人垣が連なり、われわれが行進を開始すると、彼らががやがやおしゃべりを始め、あたかもたくさんの蜜蜂<sup>みつばち</sup>の巣箱をつつついたような騒ぎになった。W

日本人はとくに音楽が好きらしい。下田で提督が軍楽隊とともに上陸すると、町中の半数の人々が、それを聞くために集まって来た。——「ハイネ世界周航日本への旅」



水彩画 出品リスト19



油彩画 出品リスト18

下田 Simoda | 1854年6月8日

## 下田の寺院境内にて、 日本側の委員の前で軍事演習を行う

Exercise of Troops in Temple Grounds Simoda Japan, in Presence of the Imperial Commissioners June 8th, 1854.



石版画 出品リスト22

### 🖼️ 場面説明

了仙寺境内にて、楽隊の演奏や軍事演習が披露されましたが、『日本遠征記』には軍事演習についての記述はみられませんでした。『ハイネ世界周航日本への旅』には実施日が異なるものの、軍事演習の様子や楽隊の音楽について記されています。画面右端に楽隊の一部、境内では演習をする隊員の姿、手前には日本人が描かれています。

十五日※、提督は幕府使節のもとに最後の公式訪問を行なった。その華やかな行進には全員が参加した。約三百名と野砲が四基である。美しい環境と絵のような山々に囲まれた小さな町、それに上陸地点から下田了仙寺 Simoda-dio-rengo (これが式典の行なわれる本山の寺の名である) に至る、華麗な行進が続く大通りなどは、まさに生氣ある光景となっていた。🇯🇵

※記述では1854年6月15日であり、6月8日ではないが、参考として掲載。以下の引用も同様である。

大砲も美しい木々の蔭に運び並べられてあった。奏せられる音楽は愉快なもので愛らしい娘や婦人も交じえて、下田の町の人口の四分の三までが出てきて、耳をそば立てて聞いていた。🇯🇵

最後に、小演習が行なわれた。わが砲兵の発砲や、歩兵の展開のさいに見せた迅速さ、精確さは、日本人たちにとって驚嘆、称賛的となった。🇯🇵



油彩画 出品リスト21

## ハイネとブラウン

画家のヴィルヘルム・ハイネ（1827－85）と画家・写真家のエリファレット・ブラウン・ジュニア（1816－86）は、志願してペリー艦隊の一員に加わります。1852年ミシシッピ号でペリーがアメリカのノーフォークを出発した時、ハイネは25歳、ブラウンは30代半ば、ふたりはマスター・メイトという役職に就いていました。やがてハイネにはサスケハナ号の甲板上に木造のアトリエが与えられました。ハイネは各地で風景や人々をスケッチし、ブラウンはスケッチのほか、銀板写真を撮影します。

ペリーは各地で学術的な調査もおこなっており、ハイネは画家としての仕事のほかに、各地の鳥や獣を猟銃で撃ち標本をつくること、海図や地図のための測量、現在の小笠原諸島（父島）の踏査などに携わりました。下田では詩と贈りものを交換するなど、日本人との交流もありました。ここでは文章を通じて二人の日本での仕事の様子をみていきましょう。

[那覇] 提督はまた、海岸に家を一軒手に入れることにし、銀板写真術を委託してあった画家のブラウン氏に、材料を準備してその家に住み、仕事を開始するよう指示した。 **P**

[那覇] このとき携行した銀板写真は、これらの人物を写す目的にすこぶる役に立つことがわかった。この写真を操作したB氏[E・ブラウン・ジュニア]は、場所と気候のため、はじめむづかしくていくらか苦勞したが、それもやがてうまく撮せるようになった。 **H**

[相模湾] 私は一日中、甲板上にあって、B氏※と一緒に海岸線を写生した。すっかり凍えてしまったので、床に入って横になった。しかし十一時ごろになると、暴風はいっそうつづってきた。 **H** ※ブラウン

[下田] 丘の麓や町外れなどにはかなり大きな寺院が八つもあった。ここには、礼拝用の御堂とならんで僧侶が使ったり、寺院に宿泊する旅人用の建物[庫裏]があった。その一つを私はアトリエにしたり、それに付属する庭園をブラウン氏は銀板写真の撮影に使用した。僧侶たちは、これらの仕事をことに注意して観察していたし、訪問者も多く来ていたが、彼らも茶色の木箱がいろいろな写真を作り出すその早さと、見たものとそっくりそのままの図にまったく驚嘆していた。 **H**

絵の中にはハイネやブラウンと思われる人物が描かれています。

ハイネ

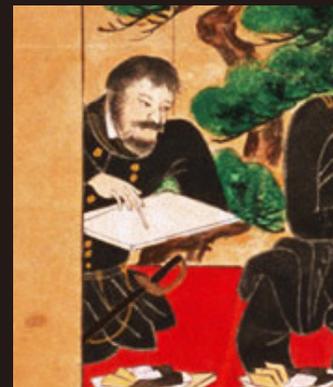


出品リスト13（部分）

ブラウン



出品リスト18（部分）



出品リスト4（部分）



『日本遠征記』「琉球、泊村の寺院」（部分）

## 絵でたどるペリー来航展 出品リスト

番号	作家名	作品名	制作年	材質	所蔵先
1	作者不詳	神奈川内宮河岸図	江戸時代後期	紙本着色	横浜市中央図書館
2	作者不詳	横浜村真田家固ノ図	江戸時代後期	紙本着色	横浜市中央図書館
3	作者不詳	寅三月十三日神奈川ヨリ異船ノ退帆ヲ観ル図	江戸時代後期	紙本着色	横浜市中央図書館
4	土屋秀禾	使節ペリー横浜応接の図	江戸時代末期	紙本着色	横浜市中央図書館
5	作者不詳	脚船本船エ寄ルノ図	制作年不詳	紙本着色	横浜市中央図書館
6	作者不詳	黒船来航絵巻	江戸時代末期	紙本着色、一巻	神奈川県立歴史博物館
7	作者不詳	無款 黒船絵巻	江戸時代末期	紙本着色、一巻	神奈川県立歴史博物館
8	伝 ベーター・B.W. ハイネ	ペリリ提督横浜上陸の図	1854 (嘉永7/安政元) 年以降	油彩、カンヴァス	横浜美術館
9	ベーター・B.W. ハイネ	ペリー提督の横浜上陸	1854 (嘉永7/安政元) 年	水彩、紙	明星大学
10	ベーター・B.W. ハイネ	ペリー日本遠征の石版画(横浜上陸)	1855 (安政2) 年	石版(リトグラフ)	凸版印刷株式会社 印刷博物館
11	伝 ベーター・B.W. ハイネ	ペリー提督 首里城より帰還の図(1853年)	1853 (嘉永6) 年以降	油彩、カンヴァス	慶応義塾大学アート・センター
12	伝 ベーター・B.W. ハイネ	ペリー提督 首里城より帰還の図(1853年)	1853 (嘉永6) 年以降	油彩、カンヴァス	個人蔵
13	ベーター・B.W. ハイネ	ペリー日本遠征の石版画(琉球首里城のペリー)	1855 (安政2) 年	石版(リトグラフ)	凸版印刷株式会社 印刷博物館
14	ベーター・B.W. ハイネ	ルビコン河を渡る	1853 (嘉永6) 年	水彩、紙	明星大学
15	ベーター・B.W. ハイネ	ペリー日本遠征の石版画(ルビコン河を渡る)	1855 (安政2) 年	石版(リトグラフ)	凸版印刷株式会社 印刷博物館
16	ベーター・B.W. ハイネ	ペリー提督の久里浜(強羅浜) 上陸	1853 (嘉永6) 年	水彩、紙	明星大学
17	ベーター・B.W. ハイネ	ペリー日本遠征の石版画(久里浜上陸)	1855 (安政2) 年	石版(リトグラフ)	凸版印刷株式会社 印刷博物館
18	伝 ベーター・B.W. ハイネ	ペリリ下田上陸図	明治時代	油彩、カンヴァス	個人蔵
19	ベーター・B.W. ハイネ	ペリー提督の下田上陸	1854 (嘉永7/安政元) 年	水彩、紙	明星大学
20	ベーター・B.W. ハイネ	ペリー日本遠征の石版画(下田上陸)	1855 (安政2) 年	石版(リトグラフ)	凸版印刷株式会社 印刷博物館
21	伝 ベーター・B.W. ハイネ	ペリー提督 黒船陸戦隊訓練の図(1854年)	1854 (嘉永7/安政元) 年以降	油彩、カンヴァス	慶応義塾大学アート・センター
22	ベーター・B.W. ハイネ	ペリー日本遠征の石版画(下田寺院前の軍事演習)	1855 (安政2) 年	石版(リトグラフ)	凸版印刷株式会社 印刷博物館
23	ベーター・B.W. ハイネ	ペリー提督の肖像(『日本遠征石版画集』より)	1856 (安政3) 年	石版(リトグラフ)	神奈川県立歴史博物館
24	エリファレット・ブラウン・ジュニア	遠藤又左衛門と従者	1854 (嘉永7/安政元) 年	ダゲレオタイプ(レプリカ)	横浜美術館

### 資料

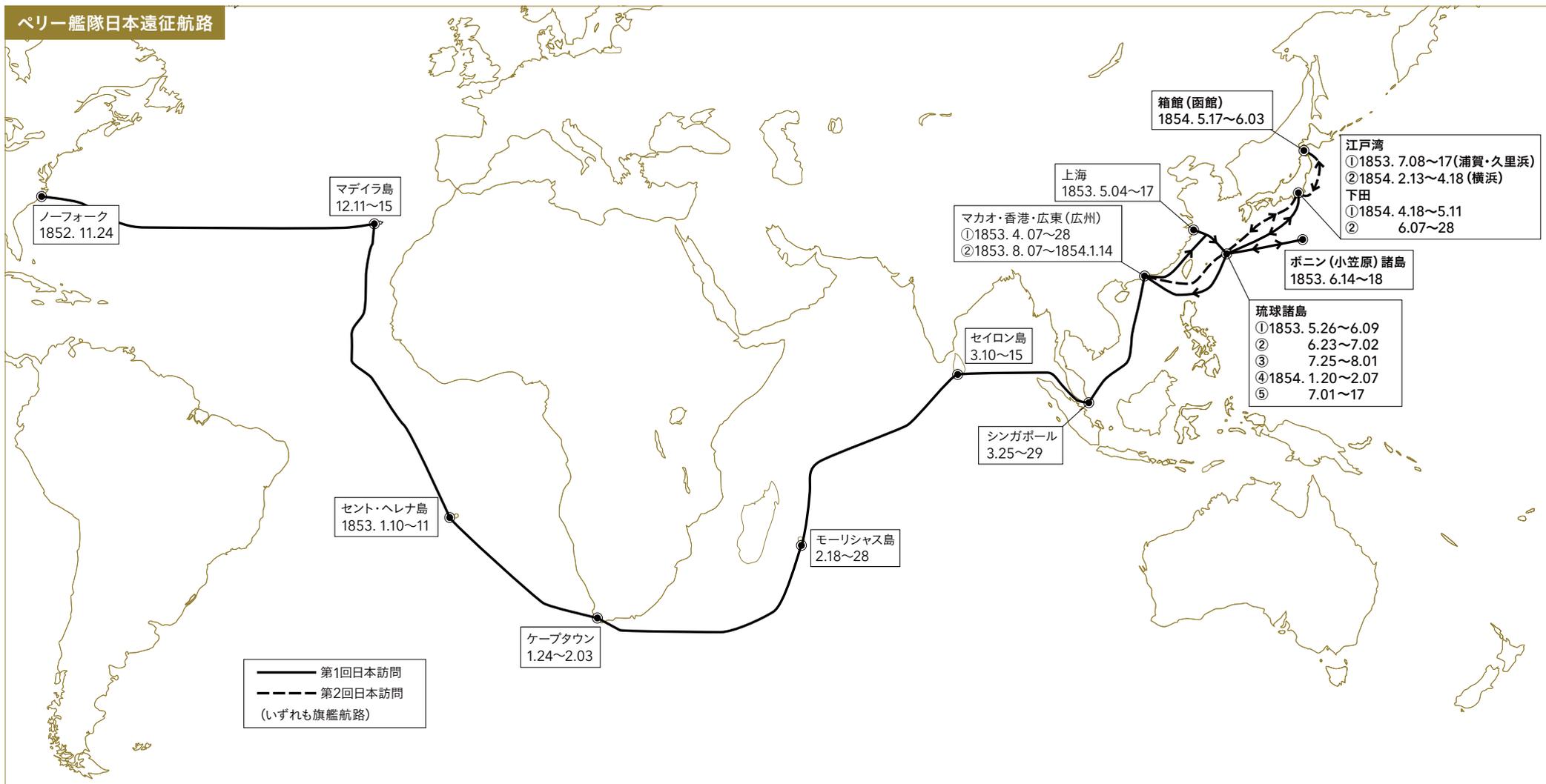
25	フランシス・L. ホークス編	『ペリー艦隊日本遠征記』	1856 (安政3) 年	書籍(3巻) / 第1巻内挿絵(スライドショー・パネル)	横浜美術館
26		石版画の技法材料・道具一式			横浜美術館(市民のアトリエ)

### 引用文献

『ハイネ世界周航日本への旅』 新興国叢書 第11輯 雄松堂書店 1983年→**H** 著者=ヴィルヘルム・ハイネ 翻訳者=中井晶夫  
『ペリー艦隊日本遠征記』(上・下) 万来舎 2009年→**P** 著者=M・C・ペリー、F・L・ホークス(編集) 翻訳・制作=オフィス宮崎  
『ペリー日本遠征随行記』 新興国叢書 第11輯 雄松堂書店 1970年→**W** 著者=サミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ 翻訳者=洞富雄  
※本冊子で引用した文章は、上記文献の表記のままです。

### 参考文献

『伝記 ペリー提督の日本開国』 双葉社 2000年 著者=サミュエル・エリオット・モリソン 翻訳者=座本勝之  
『ペリー提督日本遠征記』(上・下) 角川ソフィア文庫 2014年 著者=M・C・ペリー、F・L・ホークス(編集) 監訳者=宮崎壽子  
『ペリーとともに一画家ハイネがみた幕末と日本人』 三一書房 2018年 著者=フレデリック・トラウトマン 翻訳者=座本勝之  
『ペリー来航と横浜』 横浜開港資料館 2004年



〔ペリー艦隊日本遠征記〕(下)資料編を元に作成

**謝辞**

この展覧会を開催するにあたり、ご助言、ご協力いただきました関係者の方々、  
 またここにお名前を明記を差し控えさせていただきました皆様に深く謝意を表します(敬称略・50音順)。

飯沼一雄/碓井文昭/茅原廉子/座本勝之/志澤政勝/高倉幸一/瀧川和也/西川武臣/  
 外間一先/宮崎壽子/吉田 孝/ Robert Eskildsen

凸版印刷株式会社 印刷博物館/オフィス宮崎/神奈川県立歴史博物館/慶応義塾大学アート・センター/  
 明星大学/横浜市中央図書館

**展覧会担当**

横浜美術館教育普及グループ 端山聡子/太田雅子/古藤 陽/関 淳一/石塚美和/六島芳朗/永田麻子  
 柏木智雄(横浜美術館副館長)

**展覧会情報**

横浜美術館開館30周年記念/横浜開港160周年記念  
 絵でたどるペリー来航  
 会期: 2019年9月21日[土]~11月10日[日]  
 会場: 横浜美術館 アートギャラリー1  
 主催: 横浜美術館(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団)

発行日: 2019年9月20日  
 編集: 横浜美術館  
 デザイン: 阿部太一[TAICHI ABE DESIGN INC.]  
 発行: 横浜美術館  
 〒220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1  
 ©2019 横浜美術館  
 印刷・製本: 株式会社 野毛印刷

